

エロ事師たち

野坂昭如



エロ事師たち 野坂昭如



講談社

第1刷 昭和41年3月10日

エロ事師たち
野坂昭如

© 1966
AKIYUKI NOSAKA

定価 270 円



Printed in Japan
落丁本・乱丁本は
お取り替え致します

発行者 野間省一
発行所 (株) 講談社
東京都文京区音羽町3-19
振替 東京 3930
電話 東京 (942) 1111(大代表)

印刷所 (株) 豊国印刷
製本所 (株) 大 製

エ
ロ
事
師
た
ち

装 装
幀 幀
写 幀
真 幀
浜 山
田 内
啓 暉

いかにも今様の文化アパート、節穴だらけの床板の大仰なきしみひときわせわしく、つれて深く狎れきった女の喘鳴が、殷々とひびきわたる。ときおり一つ二つ、言葉がまじる。

「な、何いうとんのやろ、もうちよいどないかならんか」

スプヤん、じれったげに畳に突っ伏し、テープレコーダーのスピーカーへ耳をすり寄せた。かたわらの、それが癖で滑稽なほどみじかい脚をチマチマッと両膝そろえて坐り、屑テーブ丹念につなぎあわせる伴的、口をとがらせてつぶやく。

「あかんで、それで精一杯や。なんしアパートの天井裏いうたら電線だらけや、ハム入るのんしゃアないわ」

なるほどそういわれると、きわめて抑揚に富む息づかいとは、対蹠的に無表情な低い雑音が、我物顔に入りこんでいて、この両者、音程がよう似てる。床下から録音されているとはつゆ知らず、多分、ベニヤ一枚へだてた両隣の耳をはばかってだろう、つけっぱなしのラジオは、かえって雑音をくぐり抜け、ヘジンジンジンタンジンタカタッタッタ、といと気楽にひびいていた。

「肝心のところがもう一つきけん。そやけどよう唸りはる女や」

スプヤン、情けなく溜息つけば、伴的はなぐさめるように、「京都の染物屋の二号はんや、週に二へんくらい且つく来よんねん、丁度この二階やろ、始まったら天井ギギイいうよってすぐわかるわ、もうええ年したおっさんやけど、達者なもんやで」

ちよいまち、とスプヤン大仰に手を上げ伴的をとめる。女がしゃべったのだ。

——あんだ、御飯食べていくやろ、味噌汁つくろか。

男はモゾモゾと応え、ききとれぬ。と、突拍子もない声がスプヤンの鼓膜にとびこんできた。

——お豆腐屋さん！ うっとこもらうよオ。

男再び何事かしやべり、女おかしそうに笑う。やがてドタドタとアパートの階段を乱暴にかけ上る音、ドアのノック、咳ばらい。

——そこ置いとって頂戴、入れもんとお金は夕方に一緒にええやろ、すまんや。

しばし静寂の後、再び床板さしみ女は唸り、スプヤンあっけにとられるのを、伴的ひと膝にじりよって、「やっとなる最中に飯のお菜たのみよったんや、ええ面の皮やで豆腐屋も」

スプヤンこの説明をきくとひっくりかえって笑い出し、やがて「リアリティあるやんか」といった。リアリティは近頃スプヤンの口癖である。というのも客の眼エや耳が肥えてきよったからで、まあたいがいのことにはおどろきよらん。テープ一つにしたところが、たとえば「雨の夜」と呼ばれる三十分物の、初めから終りまで女がいやいややと抵抗する異色篇も、これならとスプヤンお顧客の尼ヶ崎の銘木屋へもちこんだが、中で男の「人間は運命に逆つてはいけないよ」という台辞一言に、それまで身をのり出してた餓鬼が、フイッと顔を上げ、「なあ、女口説く時、こんなこというあほおるかア。インチキ臭いで」とどのつまりが只聴かれ。「そらみんな必死やさかい、あほなこともいいますやろ」テープ中の男になりかわってスプヤン弁解したが空しいのであった。

「考えてみたら東京弁があかんねんわ。あいつらの口きいてたら、ほんまのことかて嘘いうてるみたいや、感情こもってえへんちゅうのかな。雨の夜のテープかて、ヒトニハサダメガオマンネ、ナア、コレモアインタノサダメヤオマヘンカ、サダメニサカラワント、サ、ソノテエドケトクナハレ、とこういうとつたら、あの餓鬼かて満足しよったんや」

スプヤンの腹立ちまぎれの妙な声色をきいて、ほならいっちゃったろかと、伴的ひきうけて出来たのがこのテープ。豆腐屋の他に、これは隣り部屋の二階に住む南のアルサロの女給と客の痴語、床板のきしみとハムは同じだが、ただこの女給、歯アでもわるいんか、シーシーと音を立て、あげくの果てに男がふぬけた声で、「アーコノカンゲキ」と往生するのもあれば、また珍らしくも男がはなからさいごまで、「スキスキスキッ！ スキスキスキッ！」とわめきつづける

テープ。これは一部屋おいて隣りの学生と恋人の陸言だった。

「なんぼや、安うしといてや」

「一本、五千円ほどもろとこか」

伴的ふたび坐り直して鼻水をすする。チェッこんな屑テープ使うてからに、しかも己れが住むアパートのあちやこちや盗みどりしよって元手はなんもかかつたらんやないかと心中ぼやき、だがこの三本それぞれええとこだけつなぎあわせて、リアリティ満点のエロテープ一本三千円はかたい、五十本プリントしたかてざつと十万のもうけやと、スブやん言い値で引き取った。

「あんじよう風邪ひいてもたで、徹夜で録音してんからなア」

「またおもしろいのあつたら頼むわ。来しなこのアパートの端の部屋に、寿染めぬいた夫婦布団干したあつたけど、あら新婚ちゃうか」

うれし恥かし新婚のいちゃいちゃテープやったら、こら一本一万でも高うはない。

「聞くだけやったら世話ないねんけどな、テープにとるとなるとこらぐつわるいわ。よっぽど感度ええマイク使うても、それだけハムも入るし」

さすがは伴的、心得てすでに録音をこころみていた。新婚は同じ階のはずれ、天井に忍んでマイクをセットしたが雑音が多い。いやそれより、二階にある便所の水洗の音が、聞なしにガタガタシャアシャア、ときにはあたりはばからぬ放屁の音も入り、「なんやもう気色わるなつて」あかん。さればと物干竿の節を抜き、中にコードを通してマイクを下げ、その上を洗濯物めかしたふんどしでおおい、新婚の窓辺へさしのべてもみたけれど、これは屋外の、はるか遠い夜汽車の

笛、車のクラクション、犬の遠吠えに邪魔されて、それらしき物音はけも入つとらん。

「聞くだけやったらいうて、それだないすんねん」

あきらめぬスプやんに、伴的は、押入れを開け布団の間から医者 of 聴診器をひっぱり出した。聴診器の先きはビニールのガス管に接続されている。

「このビニールの先きに漏斗ついたあんねん。そいで漏斗は新婚の部屋の天井にふせてあるちゅうわけや」

スプやん、幼き頃絵本でみたラッパの化物みたいな対空聴音機を思い出した。なんや知らんあれは二キロ先きのはえの音まできこえるいうとったなあ、つまり同じ原理やとすぐ腑におちる。

「ものすごうよう聴けまっさ。手にとる如くちゅう奴や」

「何時頃やりよんねん」

「そやな、ここにメモあるわ」

どこまでマメな奴やと感歎しながら、伴的のさし出すメモをみれば下手糞な字で、「日やうあさ七じ、女Q。月やうよる十時けんくわのあと泣いてQ。火やうナシ。水やう三びやう」などある。Qでなんや、なんやしらん終りしな嫁はんがキューいいはるねん。三びやうは、旦那があつという間にすみはってんな、これには嫁はん文句いいはってたわ、なんや三秒もかからんいうて。

スプやんけつと笑い、これもいけるでエとうなずいた。このしかけさえあつたら、十三でも銀橋でも、なんぼでもきける。こら新兵器や、そや運送屋の社長に売ってこましたろ、あの餓鬼、温泉マーク行っても肝心のことより、すぐ便所の天井から上あがって盗み聴きが趣味やねん

からなす。

「実費四千円や。五会百貨店へ行ったら聴診器古いの仰山売とうわ、なんぼでも作るで」

伴的はうすら笑ってあたりを片づけはじめ、いつときも体おちつけぬ性分なのだ。元はといえば、元町に店を構える帽子屋の伴、写真道楽の末が、気の強い女房に閉口頓首。モデルと駆けおち同棲のいざこざあってやがて親から勘当受け、今は大阪城東の大宮町に佗び住いの身だが、写真の腕はもとより確か、他にさまざまな特技をもつ。

どないやトルコでもおごろか、風邪直るでえ、とスブやん伴的連れ立って表へ出れば、折しも師走、ジングルベエやらトリーやらの陰にかくれたエロの商売、今が狙い目稼ぎ時、皎々と冴えわたる冬の月にも、心はずみ、つい鼻唄に「セントゴーマーチニン——」。

スブやん実は酢豚の略。豚のように肥ってはいても、どこやらはかなく悲しげな風情に由来するあだ名であった。戸籍上の姓名は、今は警察の公安課のみぞ知る、表向き喜早時貴とたいそうな名前で、堂ビルの裏に月五千円の電話番つきデスクを借り受けここが連絡事務所。そのビジネスについて彼は、いやスブやん一党の仲間達はお互いエロ事師と称している。

千林の雑踏かき分け、二人は駅裏のトルコへ入ったが、客があふれて待合室の椅子にさえ坐れぬ。

「現金なもんやで、ここのトルコ、いらわすちゅうの皆知っとんやな」

ジャンパーに赤い靴下のイモあんなちゃん、格子の背広に蝶ネクタイのセールスマン、ラッパズボンに貸ボートみたいな靴はパーテンか、親指と人差指で煙草つまんでせわしのう灰おとしとん

のはボロ電の学生やろ。じろじろ眺め渡すスプやんに、伴的は妙にあらたまつた口調でいった。

「ぼくは、あれ邪道や思うねえ」

「邪道てなにがや、スペシャルか」

「スペシャルはええけど、いらわすのはあかんわ。やつぱしトルコはトルコらしゅうせな」

なんでや、と問い返えすスプやんに、つまりトルコの女は技術者やねんなア。五本の指で、男の性感帯をあんじょう刺激してやな、それで楽しませるのが本来の在り方や。それを男にいらわさすやろ、いらわさすのは技術のいたるところをカバーしよるんやなあ、料理でいうたら鯉節や昆布でダシとらんとからに、科学調味料でごま化すみたいなんやで。いったんいらわしたら、今度めに男はその先きを要求しよる、それが先きへ先きへすすんでみいな、なんのこっちゃ当り前の色事と同じになつてまう。わいはあのスペシャルちゅうもんは、絶対にあれの代用品とはちゃう思うし、そいでのうたらどこにトルコの意味合いあんねん。飛田でも今里でも姫買いたらええやねんか。あないしてマッサージ台の上ねころんで、まあいうたら赤ん坊みたいにな、すべてもうあちらまかせで、こちらはまだ眼エつむってなんも考えへん。女がどないな顔しとるか、なに思とるか、どうでもよろし。五本の指で男の気づかん、いや女房やらなんやらの知らんかった男のつばを探し出して、やさしゅうしてもらう、それがスペシャルの醍醐味ちゅうもんよ。いやもつというたらな、スペシャルは男ばかりがよくなつて、女はなにも感じたらあかんもんやねん。つまりやな、あれはお母はんにしてもらうような感じでなかあかん。

「お母はん？　なんでお母はんがでてくんねな」

それまでは聞き流していたスズヤン、なんとも場ちがいな言葉に耳つかえて問い返す。

「お母はんの愛情ちゅうもんは、こうなんちゅうたらええかな、サービスええやんか、献身的やろ。そいでちよと残酷なところもあるわ、スペシャルで男が往生するやろ、その時にイヤーやらアラアヤらしいうて女がタオルでふきますわな。あの時、なんやお母はんによく似てる思うねん。男はもうその時必死やで、なんやしらんけどすがりついとるわ、そやけど女はまるでへっさらでおる、それがどうもお母はんとは赤ん坊の關係みたいなんやな」

フーンそら伴的、あんたママコンプレックスいうのとちゃうか。いやようわからんけど、なんせトルコはそういうもんや思うわ。

「十八番さん、十八番さん、おりはらへんのん」

がさつな声に呼び立てられ、ひょいと整理札みれば十八番は伴的。「マアお母はんにかわいがってもらいや」スズヤン肩をたたくと、伴的鼻をすすり上げ、水着姿二十貫はあろうかという女に引ッ立てられて姿を消した。

スズヤンみたところ四十も少し出た感じだが実はとって三十五歳、母は十七年前、神戸空襲で死んだ。はじめな死にざまであった。父は戦地へ駆り出され、母一人子一人細々と洋服のつくろいで過ごすうち、過労のためかそれまでも病身だった母の腰が抜けた。スズヤン中島飛行機へ勤め、勤労特配などあつてかつかつ喰うには困らなかつたが、さてB二九が白い飛行機雲空になびかせはじめては、母の始末に窮した。疎開するとてたよる血縁はなく、家は湊川神社のすぐ横でいわば神戸の中心、そうでなくても、アメリカは楠公さん焼くそうやとデマがとびかい、どうこ

ろんでも助かる道はない。そして二十年三月十七日、パンパンと今から思えばクリスマス風のラッカーのように軽薄な音が焼夷弾の皮切りで、「おちましたでえ」というより火の粉煙が先きに立ち、「お母ちゃんどないしょ」「ええから逃げなはれ」上半身起してスプヤンをみつめる姿に、かなわぬと知りつつ後からかかえて二歩三步、とてもその軽さに泣くゆとりはない。「お母ちゃんに布団かけて、はよかけて」スプヤんいまはこれまでと布団ひきずり出し、一枚かけては防火用水のバケツぶちまけ、また一枚おおつては水道の水を汲み、せめてこれでなんとか持ちこたえてえなと、これは切端つまって親子二人考え出した非常時の処置であった。

そのまま母の無事を祈るいとまなく、楠公さんのきわの電車道にとび出せば、すでに町内は逃げたのか人影もみえず、ただ湊川神社の木立ちめらめらと焰をあげ、今までの家並みそろって黒煙を吐き出している。しかもひっきりなしに、あの荒磯を波のひくようなザアザアという爆弾の落下音が轟き、思わず伏せてバケツを頭にかぶったスプヤんの、ほんの二米先きを、まるで荷の生えそろったように焼夷弾びつしりと植わって、いつせいに火を吹いた。

翌日、まだうっかりすると燃えつきそうに熱い焼跡を、警防団が母を掘り出したが、幾枚かけたか覚えのない布団の、下二枚は焦げ目もなく、そして最後にお母ちゃんがあらわれた。全身うすい焦茶色となり、髪の毛だけが妙に水々しく、苦悶の色はみえなかった。

「黒焦げになって、猿みたいにちちこまった仏さんもようけいてはるのや。こないに五体満足なだけましやで」

警防団員の一人が肩にまわり、一人が脚を持とうとすると、まるで金魚すくいの紙が破れるみ

たいに、お母ちゃんの体はフワッと肉がくずれ骨がみえた。ウツと口を押さえとびすきった警防団、ややしばし後に「しゃアないわ、スコップですくお」と、そのスコップの動きにつれて、指の一本一本の肉までがきれいにはがれ、くだけ、最後はこれもまるでオブラートの如くたわいなき寝巻きとごちゃまぜにむしろの担架につみ上げられたのだった。スプヤンはただ立ちすくみ、今もかしわの蒸し焼きだけは見る気もしない。

病身ではあったが気の強い女で、戦地へおもむく夫を送る朝、喧嘩をした。「後ようたのむでえ」と、町内の歓送会へでかけるきわに親父がいい、つけ加えてついスプヤんのズボンのほころびを、「はよつくろうたりや」といったのは小店ながらも洋服屋の職人、それが母の気にさわった。「これから營れの出征やいうのに、なにごたごたいうてはるのん、女みたいに」と怒鳴り、すでに高小一年だったスプヤんのズボンまたたく間にずり下げると、部屋のスみにほうり投げ、「ぐずぐずせんと、他所いきの服着なさい」とこき、父はそれに抗弁もせず、玄關の前の路地で、顎を埋めるようにしながら、応召の赤だすきを直していた。

母、いやスプヤンにとつても、これが父の最後の姿となった。

「スペシャルとお母はんか、おもしろいこといいよんな、そやけどあの母親やったら、どうも感じんで、おそろしかったもんなあ」

まだまわらぬトルコの順番を待って、伴的の言葉に否応なし母親のあれこれ想い浮かべたスプヤンだが、まるでピンとこない。

母親の気の強いのは、その生理的欠陥にあるようだった。小学生の頃、玄關を入ると、いや八

軒長屋のその路地を少し入ると、長火鉢の銅壺で煎じる実母散やら中将湯の臭いがした。便所のおとし紙の下に、珍らしくなったチヨコレートの銀紙をみつけ、「ウワお母ちゃん便所でチヨコレート食べとんね、ずるいわ」といって、いやという程横面張られたこともある。チヨコレートではなくて坐葉だと知ったのははるか後になってからだ、この時の記憶をそれほど長く持ちつづけたのは、もちろんチヨコレートに対する執念ではなくて、その時の母のすさまじい表情、自らの女としての欠陥を子供に見破られた口惜しさが、スズやんの心に灼きついていたからだろう。「あのお母ちゃんとお父ちゃん、ほんま寝とったんかいな、もっとも寝たからわいが生れたちゅうわけやけど」思わず苦笑するところへ、「いやらしわこの人にたにた笑うてから、はよおいなはれな」スズやんの女が呼んだ。

以前は旅館であつたのを、そのまま居抜きでトルコに仕立て、襖を開けると畳の上にマッサージ台があり、床の間を少し張り出してそこがトルコ風呂、体を洗うのは共同浴場だが、その客はなく、スズやんの通された部屋も冷え切っていて、どうも蒸し風呂にすらスチームの通る気配はみえぬ。

「蒸してんか、くたびれとんね」

「ほなもつとはよこなあかんわ。この時間やったら特別オンリーや」

「特別でなんやねん」

しらばっくれてきくと、うちの方からいわれへん、お客さんの思し召し次第やもん、ほな千円やるわ、あと二百円つけてえなどのやりとりあって、たちまち女はスズやんのズボンをはぎにか

かり、このあたりたしかに父親出征の朝の母に似ていたが、さすがボンとほうりはせず、座敷にふさわしい古びた衣桁へかけた。

女は当然のようにスズやんの手をとると、「二本指あかんよ、一本だけやし」と自分の下着へ導く。スズやんあわてて、「わしそれあかんねん、なんにもせんでええから、あんただけやって」ふだんなら二本指どころかけつのケバまで抜いたろかというスズやんだが、今は伴的の説が心に残っている。

「お客さんここはじめて」「ウン」「なんでいややのん」「なんでもや」「けったいな人」「うるさいな、だまっとれや」「フン」と女は乳液たっぷり掌にふくませて、むんずとひつつかむ、スズやん「ちべたア」と悲鳴をあげる。

スズやんの家は千林から旧京阪で駅一つ先の滝井にあり、女房お春は床屋の店を張る。といっても五年前、亭主に死にわかれたお春がとって十一の娘をかかえ、その店をつぐかたわら二階の一部屋を人に貸し、そこへスズやんがころがりこんで半年後に後家のふんばりもはかなく、入むこの形となったのだ。はじめの頃はスズやんが忍ぶと、添い寝する娘の恵子めざとく起き出し、「お母ちゃんの後には誰かいてはる」とうつつにさけび、それをまた女房いや当時は奥さんとスズやん呼んでいたお春が、「なにいうてんの、恵子ちゃん夢みてはるのよ、熱あんのとちゃう」などその額にしさいらしく手をあてごま化すのを、その腰にかじりついたまませいぜい背を丸め、「うまいこと嘘つきよるで」と感心していたものだが、これがたたってか、恵子はいまだになつかぬ。